

ラカニアンラカニアンの創造者

1953年のローマ講演直後の質疑応答の際、ラカンから公衆の面前で「きみは分析家である (tu es l'analyste)」と命名されたときから、セルジュ・ルクレールはラカニアンとして生きることを運命づけられたといえる。ラカン自身からは手酷く扱われることもあり、ルクレール自身も死を目の前にしたラカンに猛烈に抗議したこともあったが、ラカンと家族ぐるみの付き合いをし、ラカンからファーストネームで呼ばれた唯一の弟子であることが知られている。¹ ルクレールの生涯と作品を追うことは、このラカンによる命名の帰結を追うことに等しい。こうした命名を受けたのは、ルクレールの教育分析が唯一無二の性質を備えていたからであろう。そして、それはフィリップという主体の「一角獣の夢」として報告され、ラカン派の臨床を非常によく例証する症例として知られていった。晩年のルクレールはフィリップ症例が自分自身の症例であることを隠さなくなっていく。²

本論稿では、ルクレールの「一角獣の夢」を紹介して、それがルクレール自身によってどのように書き換えられていったかを追ってみたい。彼が体現していたラカニアンの像を脱構築するのが、ラカン以後のラカン派の分析家の大きな仕事になったとさえ言えるだろう。ラカンと共にありながら、ラカンの見えていないものを体現できていたという意味では、ラカンにとっての対象 a の位置を取りえた稀有な分析家でもある。

1924年、ストラスブールにて、Liebschutz という姓をもつユダヤ系の家庭に生まれた。両親は不可知論者だったが、ユダヤの伝統や祭式には忠実な家庭だった。紡績工場の創業者だった父親はミュンヘン合意の時点でストラスブールを離れ、各地を転々としたあとマルセイユに辿り着き、そこで Leclair という偽名を得た。父親はこのルクレール姓を戦後も維持することにし、息子のセルジュもそれに従った。

ルクレールの精神分析との出会いは、あるヒンドゥー教の僧侶を経由している。この僧侶からフランソワーズ・ドルトを紹介され、さらに彼女からラカンを紹介されたのである。ドルトの奇妙な精神分析的解釈を怪訝に感じて以来、精神分析にたいする警戒心は生涯を通じて変わらなかった。精神分析の伝達は精神分析内部の言説にとどまるべきではないことを身をもって示したのもルクレールという分析家の特徴だろう。分析にたいしてつねに extime なポジションを取ることを厭わなかった。

パリ精神分析協会 (SPP1926年創設) において1949年から1953年までラカンに教育分析を受けた。1953年、フランスの精神分析運動における最初の分裂が起きたときに、ルクレールはフランス精神分析団体 (SFP1953-1963) を創設したラカン、ラガーシュ、ドルトらに従った。そこでルクレールは書記を務めたあと、1961年から1965年まで会長職を引き受け

¹ Éric Laurent, « Serge Leclair », *La Cause freudienne*, n° 29, 1995, p.12.

² Serge Leclair, *Psychanalyse 2*, Interview avec Roudinesco.

ている。前述のグラノフ、さらにはフランソワ・ペリエと共に三頭体制を築いて、SFPがIPAに統合されるように折衝を続けた（そのあいだルクレールはIPAの会員であり続けた）。しかし、その努力は1963年に無駄なものとなった。1964年にラカンがEFPを創設すると、ここでもルクレールはラカンに従っていく。しかし、組織内での指導的な位置には関与しなくなる。1959年にはボンヌヴァル国際学会にラプランシュと登壇して、内外ともに知られた分析家としての位置を確保した。おそらく、ラカンの弟子たちによるラカンへの朝鮮の最初の狼煙をあげた所作として理解されただろう。レ・タン・モデルヌ誌への投稿、およびラカンとは立場的に対立するアンリ・エーの開催した学会での発表となったからである。「フランスにおけるフロイト主義者のうちで、最も正統的で、最も勇気があり、最も愛された臨床家として、つねに細分化され、つねに分裂していたフランスの精神分析共同体を統合しようと試みた」とルディネスコは理想化している。

ルクレールは早くから精神病の治療に興味を持っていたとされる。1957年に博士論文の口頭試問を受け、翌年33歳で博論を出版している。³ 精神病を治療するにしても、当時の精神病薬のレベルの問題もあり、精神分析と薬物治療の併用という考え方そのものも受け入れられていなかった。また、精神科医でもあった精神分析家たちは余計に精神病の精神分析的治療について消極的だったこともある。ラカンの「精神病の治療の前提的問題について」が1958年に出版されるまでは唯一のラカン派の精神病臨床について書物であったこともあり、エリック・ローラン、モード・マノーニは本書を非常に斬新なものとして紹介している。1999年に再版されたときの本書解説には、ルディネスコが現在でも読み継がれるべき一級の研究書と記されている。⁴ ここでは、ルクレールは父の名の排除に明白に言及していることは注記しておきたい。のちにこのポジションを変更していくからである。ルクレールは神経症に限定されない臨床に視線を向けていたが、実際にはどこまで成功したかは未知数である。分析家を養成するなかで明らかになってきた精神病圏の分析主体の存在にはいち早く気がついており、それを『子どもが殺される』のなかで表明している。この精神病への関心の内実については本稿後半部分で詳しく論じることにした。⁵

³ Serge Leclair, *Principes d'une psychothérapie des psychoses* (1958, 1999)

⁴ ここではVictor SとRobert Lという二症例が提示されている。Victor S症例は何のために配置されているのかわからず、Robert L症例はきちんと整理されておらず、患者のノートを丸々引用してきて延々と読まされ、その解説のためにまた同じ文章を読まされるので辟易させられた。シュレーバーとの比較もそれほど成功しているとは思えない。

いわゆるサイコセラピーなどにはなっておらず、医学論文であり、ルクレールが何らかの介入をして治療を試みたものではない。ここは誤解を受けやすいところだ。この博士論文の体裁はあまり誉められたものではない。オリジナリティにも欠けている。とくにラカンの博士論文と比較してしまうと見劣りがする。2年後に出版されたラプランシュの博士論文（『ヘルダーリンと父の問題』）がフォーコーによって称賛されたのとは対照的である。

この書物を読むことの価値はPsychanalyserを執筆する著者が精神病をどのように看做しているのか、ラカンの高弟と呼ばれることになるルクレールのラカン理論の理解の水準を測ることにある。

⁵ 『現実界を剥がす』（Démasquer le réel : 1971）前半が1950年代から60年代までに執筆された強迫神経

1968年の『精神分析すること』はフランス精神分析の歴史においても重要な貢献になっている。これによって、ラカンの象徴界の優位が臨床的に証明されたためである。これでルクレールは文字通りラカニアンとなった。と同時に、これはラカンをはじめとするフランス精神分析が次のパラダイムに移行するための起爆剤にもなった。

1969年にルクレールはパリ第8大学ヴァンセンヌ校に最初の精神分析研究科を創設した。デリダやフーコーらの支援もあり、大学の言説と精神分析の実践を接続させようとして、パリ第8大学に精神分析研究科を立ち上げたのである。講義を担当した講師たちも授業ではなく祝祭のような雰囲気だった、もしくはパリのサロンとそれほど変わらない雰囲気だったと述べている。⁶ 大学でのルクレールの教育の内容は、現在から振り返ると、精神分析へのイントロダクションとしてそれほど悪いものではなかったと思われるが、バデューも証言しているように、左翼系の動きが強い大学においては、ルクレールの試みは大きな誤解を受けやすいポジションにあったことは確かだろう。さらには、ラカンをはじめとしてEFPの重鎮たちの批判を受け、この冒険は1970年には終止符を打たれる。しかし、精神分析研究科はジャック＝アラン・ミレールに譲られて存続することになった。

大学での精神分析の教育が失敗したとはいえ、Cerisyでの国際学会を開催したり、政治的・宗教的・文学的・哲学的な連携を探ったり、パストゥール通りでの1年間ほどMutation en acteという団体を結成したり、南米出身のIPA系精神分析家でデリダと近しかったルネ・マヨールが創刊したコンフロンタシオン誌に起稿したり、MLFと共闘したりとルクレールの活動の幅を狭めることはなかった。しかし、1977年でのリール学会での孤立、ドゥーヴァイル学会での発表の不評などもあり、EFPとは次第に距離を取るようになる。

1981年のラカンの死去の直前には、ラカンに公開書簡を送ってもいる。『魅惑を断つ』をInter Éditionsから出版した。そこでは、ラカン派にたいする批判があり、ミレールにたいす

症の主体の症例報告、後半はヴァンセンヌの講義録が収録されている。

ジェローム症例(1956)、フィヨン症例(1959)、デュロック(1965)の三症例が提示されているが、デュロック以外はPrincipe d'une psychothérapie des psychosesと同時期に執筆された論文ということになる。ジェローム、フィヨン、デュロックの順番に従って臨床記述の精度が上がっている。三症例報告はすべてが男性の強迫神経症についてのものになっていることには注意が必要だろう。21頁の注記にあったように、ルクレールの近しい友人から女性の症例も入れた方がよいのではないかという示唆もあったが、ルクレールは男性強迫神経症にこだわったということだ。それは強迫神経症の専門家であったシャルル・メルマンのことが念頭にあったのかもしれないが、この著作、およびルクレールの臨床を考えるうえで重要なポイントとなる。

フロイトを読んでいることがルクレールの強みであり、それゆえにラカンの読解がうまくいかないところがある。というのは、フロイトとラカンに同時に忠実になることが難しいことがルクレールを見ているとよくわかる。ラプランシュのように完全にフロイトに傾いてしまえばよいが、ルクレールはラカンに忠実になろうといて自らフロイト読解および快樂理論によってブロックされてしまっている。それはラカンの目には明らかだったに違いない。また、臨床の幅を広げていくうえでルクレールのポジションは障害になる。あまりに規範的なエディプス概念は分析の適用範囲を自然と狭めてしまうに違いない。

⁶ バトリック・ギヨマルとの私的な会話のなかでの発言。

る論駁があり、シニフィアンについての透明な論理を展開した論文が見受けられる。⁷1983年にはテレビで治療の生中継をするという大胆極まる Psy-show という番組を開始するが、10回ほど放映したところで中断となるが、ドルトのラジオ番組よりもインパクトのある事象としてフランス人の日常生活に精神分析が闖入したと思われる。1989年には APUI を創設して、分裂を繰り返していた精神分析団体の共闘を訴えたが、あまりその声は聞き取られなかった。

エリック・ローランによれば、ラカン派の臨床症例の構築 (construction des cas) のモデルを生み出したとされる。つまり、現在のラカン派の臨床報告のスタイルはルクレールによって確立されたというのである。ルクレールは哲学の素養もあったが、なによりラカンにはない文学的な文体をもつ書き手であった。ラカンの文体はまさにラカン以外の誰にも書くことのできないバロックな文体であり別格な存在になるが、たとえば、J=B・ポンタリスはラカンから離れたが、サルトルからは離れなかった分析家=作家として、文才を発揮する分析家になったが、ルクレールは夢や言い間違いなど無意識の現象に特有な適度な抜け感を維持しながら、哲学と文学のあいだをいくような文才を駆使できる分析家だった。臨床記述の冴えという点でいえば、同時代に『精神医学の発展 Évolution psychiatrique』に載せられた強迫神経症の事例はまさにラカン派の臨床提示のモデルとなったと主張しても誤りではないだろう。

しかし、それをさらに上回るのが「一角獣の夢」の症例として知られるフィリップ症例である。これはルクレール自身の症例であることが知られているため、彼自身がラカンと行った教育分析の報告になっている。そのこと自体がもっと知られてよいはずだが、これまでそれほど強調されてこなかった。ここで記述された臨床スタイルがラカンの臨床の理念型と捉えられたことはほぼ間違いなく、また現在に至るまでラカン派の臨床提示のパラディグムとなっていると主張して間違いはない。

⁷ 『魅惑を断つ』(Rompre les charmes : 1981)

狼男を丁寧にドイツ語で読んでいる。またフロイトの分析家の欲望を明らかにしているが、つまり、隠されたものを明らかにする侵犯を中心とした欲望の誕生を説明する。フロイトの欲望は、侵犯の欲望もしくは真理を暴く欲望とされ、その欲望はドイツ語とフランス語のシニフィアン交差によって換喩的に把握されている。フロイトの欲望は明らかにしようとするところはセルジュ・コテ (Serge Cottet, *Freud et le désir du psychanalyste*, Paris, Le champ Freudien, 1996) と同じところもあるが、どうしてもエディプス概念を中心としているため、現代から眺めると、やはり時代に制約されている側面があるように思われる。実際、同時期のラカンはルクレールが話題にしていることよりも随分と先に走っている。1966年の時点で、ラカンとルクレールの距離はすでに大きかったのかもしれない。